

兩唐志日本國見在書目錄に賈大隱老子述義十卷をのす、賈至は即大隱であらう。大隱は周禮及儀禮の疏の著者賈公彦の子で、禮部侍郎にまでなつた人、其父公彦の周禮義疏中に、老子河上公注を引いて居る點から想像すると、大隱の述義は河上公注を推演したものであらうと思はれる。而して具平親王の弘決外典鈔に、賈大隱の老子述義六條が引かれてゐるが、此を熟讀すると亦河上公義の敷衍である。瀧川君山先生の所藏にかゝる舊鈔河上公本老子の初に、賈大隱の述義を引いて、「述云凡五千三百二言、道經二千三百八十二字、德經二千九百二十字也」とあつて其經本の總字數をあげてゐる。

八七、車弼老子疏七卷

佚

張君相集注には車惠弼として引かれてゐるらしいが、杜光庭は道士車弼といつてゐる。

八八、李榮注老子二卷

殘缺

此書は杜光庭と宋志とに見えてゐる杜光庭は任眞子李榮注と題してゐる。李榮の傳記は詳細なことは知らぬ。佛祖統紀顯慶三年の條に沙門義褒、道士黃頤等が官中に談論したとき、道士李榮が本際義を立てたこと、同四年の條に李榮が道生萬物義をたて僧慧立に詰難せられたことを記し、佛道論衡に其問答を録し、又顯慶五年に李榮が僧靜泰と化胡問題を議論してゐること及び龍朔二年に李榮が靈辯と問難したことをのせてゐるから、李榮は大體高祖の世の人であらう。

ることが判る。又杜光庭によると李榮は任眞子と號したこと、又續高僧傳義褒傳によると東明觀の道士であつたことが判る。其老子注は杜光庭も宋志も二卷としてゐるが、現に道藏絲字號に李榮注の殘卷があつて四卷としてゐる。それから又道藏の使字號可字號覆字號に涉つて強思齊の道德眞經玄德纂疏二十卷があるが、その中に李榮注が收められて居る。吾友石濱學士の言によると巴里の敦煌本中にも李榮の注の斷簡があるといふ、此等を以て李榮注の大略は知られる。

八九、黎元興老子注義四卷

佚

杜光庭によると黎元興は成都の道士だといふ。

九〇、王光庭契源老子注二卷

佚

九一、張惠超老子志玄疏四卷

佚

宋志には張惠超の道德經志玄疏は三卷と成つてゐる。

九二、龔法師老子集解四卷

佚

九三、通義觀道士任太玄老子注二卷

佚

九四、道士冲虚先生殿中監申甫老子疏五卷

佚

九五、張君相老子集解四卷

或作八卷

佚

晁公武によると張君相は蜀郡岷山の道士で天寶以後の人らしく、其集解八卷は河上公、嚴遵、

王弼、何晏、郭象、鍾會、孫登、羊祜、羅什、廡裕、劉仁會、顧歡、陶隱居、松靈仙人、裴處恩、杜弼、節解、張憑、張嗣、臧玄靜、大孟、小孟、寶略、宋文明、褚綵、劉進喜、蔡子晃、成玄英、車惠弼等の注をあつめ三十家集解と呼んでゐるが、其列名は二十九家である。是れ恐らく君相自身を一家と勘定したのであらうといふ。此書宋志にも著録されてゐるが今は傳はらぬ。清儒阮元は道藏信字號道德眞經注疏が即是であるといふが疑はしい。(四庫未收書目)

九六、道德眞經注疏

藏本

此本は道藏信字號中の書で阮元が張君相集解だといつたところのものである。此書の卷首には顧歡述と署名してあつて、畢沅王昶嚴可均諸人は顧歡本として引用してゐるが、其中に唐人の注が羅列されてゐて、南齊の顧歡の著述とは考へられぬ。此書中引用された注は張君相の所云二十九家中鍾會、羊祜、劉仁會、陶宏景、大孟、寶略、宋文明、褚綵、劉進喜の九家を缺き、單に張云とあるのは張憑か張嗣か將た別の張氏かも知れぬ。大體張君相引據の名を存するやうであるが、其外に開元注疏、李榮、陳某の説をも引いてゐて別人の集注であるらしい。(此事吾友石濱純太郎君の考證がある。支那學第一卷第十一號及東洋學報十五卷四號)然し其内容張君相集解と似た所が多いから此に列した。

九七、蔡子晃老子注

佚

蔡子晃は續高僧傳慧淨傳、佛道論衡丙に見えた紀國寺の慧淨と談論した蔡晃であらう、從て蔡晃は高祖の時代の道士で劉進喜と略同時の人である。

九八、成玄英注老子道德注二卷

佚

同老子開題序訣義疏七卷宋志

佚

新唐志によると、成玄英字は子實、陝州の人で東海に隱居し貞觀五年に召し出されて京師に至り、永徽中郁州に流され老子莊子の疏を作つたことが知られ、佛道論衡丙卷には貞觀廿一年勅して玄昇と諸道士と力を合せて老子を梵文に翻譯せしめられた事をのせてゐるが、その時玄昇と事を共にすべく勅命あつた道士の主なる人は蔡晃と成英とであつた、蔡晃は即蔡子晃で成英は成玄英であらう。具平親王の弘訣外典鈔に莊子成疏を引くに成英疏としてゐる。是れ成玄英が古くから成英とも呼ばれた證である。從つて成玄英は蔡子晃と同時でやゝ後輩に屬したのであらう。成玄英の老子注は舊唐志に注二卷をあげ新唐志と宋志とは注二卷と開題序訣疏七卷とをのせてゐるが、杜光庭はたゞ講疏六卷をのせてゐる。之につき吾友石濱純太郎君は「成玄英にはもと注と疏とありしか或は注は疏を誤傳せるものであるかも知れぬ、而して開題序訣疏は老子經文の疏は五卷で開題と序訣の疏二卷であるらしく、杜光庭の六卷本は開題と序訣との疏を合せて一卷、之に本文の疏五卷を合せて六卷とあげたのであらう」といひ、ペリオ目錄二五

一七の老子道德經義疏卷五殘卷（即羅氏景印鳴沙石室古籍叢殘中の贊道德經義疏）が成疏であることを強思齊の玄德纂疏中に引かれた成疏に因つて立證し、其末が五卷で終つてゐることによつて本文の疏が五卷であることを斷定し、又玄德纂疏と杜光庭の廣聖義とによつて、成玄英には開題と序訣疏とのあつたことを證明して居られる（東洋學報十五卷四號敦煌古書雜考）。今成玄英の注二卷と開題と序訣疏とは佚して傳はらぬが、本文の疏五卷は強思齊の玄德纂疏から摘出して敦煌古鈔成疏殘卷の形式に従つて改寫せば完全に唐の舊式に還すことが出来る。

九九、唐玄宗注老子道德經二卷 存

一〇〇、同 道德經疏六卷 存

唐の玄宗が老子の注を完了したのは開元廿年で（易州開元碑による、杜光庭は十一年とし封演聞見記は廿一年明皇親注老子道德經、學者習之といふか、舊唐書によると廿一年正月制令士庶、家藏老子一本云々とあるから、廿一年は御注頒布の年で杜氏の十一年は廿一年の誤字であらう）翌年正月士庶人の家に老子を藏すること、毎年の貢舉に老子を加ふることを勅令し、帝躬ら經注を書して石に刻し長安左街興唐觀右街金仙觀に立て、廿三年道門威儀司馬秀等の奏請によつて諸州の節度刺史に令し各地龍興觀、開元觀の形勝の地に石臺を立て京様に模して御注を刻立せしめた。此等石臺中、懷州龍興觀に立てられたものは歐陽修趙明誠の著録に上つて居

り、邢州龍興觀に立てられたのは明の歸震川が見たといひ、易州開元觀のは今も直隸易州の龍興觀門外にある。易州の本は開元廿六年十月時の刺史田仁畹が勅を奉じて建てたもので其書者は蘇靈芝であらうといはれてゐる。此幢はもと城西開元觀にあつたが宋の乾道五年に張孝祥といふ人之を府治に移したと天下輿地碑記に記し、又同治十二年張烈文が今の地に移すと上谷訪碑記に説いて居るなど思ひ合すと、屢々移建されたもので文字の缺けた點もあるが、大體完全に保存されて居て、その缺けた部分を道藏男字號の玄宗注本で補へば、先づ玄宗手定本に近いテキストを得ることが能きる。又巴里の敦煌本中には經文を朱書し注を墨書した玄宗注本の殘卷があるときく。玄宗は其後また疏六卷を製して其注を敷演したと杜光庭はいつてゐるが、王應麟玉海五十三に集賢注記を引いて「開元二十年九月、左常侍崔沔人院修撰、與道士王虛正趙仙甫并諸學士參議修老子疏」とあるは玄宗御疏製作の事をいつたらしく、従つて疏は玄宗の自作でなく、王虛正等の手に出たらしい。玄宗は又孝經の注をかいて居るが、孝經の疏は元行沖に詔して作らしめて居るなどから推測しても、老子の注だけが自作で疏は臣下の奉勅修と見るべきであらう。彭耜道德真經集注略説に廣川藏書志を引いて、疏は王願等が玄宗の命を奉じて撰ぶ所だといつてゐる、王願は王虛正であるまいか。

玄宗御疏舊唐志と杜光庭は六卷としてゐるが新唐志には八卷とし、現今道藏本は十卷に分つて

る、而して宋志には唐玄宗注二卷と玄宗音疏六卷とをあげて、更に王顧の疏四卷をのせてる。道藏本の十卷疏は後人の分析に相違ないが舊唐志の六卷本と新唐志の八卷本とは如何なる關係にあるものであらうか。簡単に考へれば八字は六の誤りと見ればすぐ證明されるが、御注孝經に開元初注本と天寶再治本との二種があつて、其の注を異にし、元行沖の疏も又再修されたらしく、唐志に二卷本をのせ宋志に三卷本をのせてゐるなど綜合して考へると、老子の疏にも初疏と後疏とあつて、舊唐志は初疏六卷本新唐志は第二次の疏八卷本をのせ、宋志の王顧疏四卷は八卷本の疏を合せたものであるまいか。冊府元龜に天寶五載玄宗の詔をのせて載營魄の載字を改めて哉となし、上章に移し讀むべきだと勅あつたといふが、今存する易州開元幢も道藏注本も哉に改めて居らずして、郭忠恕佩觿に至り玄宗の詔に従つて哉字にしてゐるなど考へると、現今傳はる玄宗注と疏は開元時の初注及疏で、此外に再修本が存したかも知れぬ。

一〇一、杜光庭道德眞經廣聖義三十卷

存

此本は現存道藏羔字號景字號に互つて入つて居て、その卷首には唐廣成先生杜光庭と題し、序の中に前代の詮疏箋注六十餘家を列し、最後に玄宗の注と疏を讚歎して、自ら衆書を採摭して玄宗の聖義を推廣して廣聖義三十卷を纂成したと結んで居る。序末の年紀は天復元年龍集辛酉九月十六日甲子とあつて玄宗注成る後百七十年後の著作である。

一〇二、王眞道德經論兵述義二卷

存

此書現に道藏器字號中に入る。但道藏本は道德經論兵法要義述と題して四卷に分けてゐる。思ふにもとは二卷で後を開いて四卷としたものであらう。其書の内容は先づ老子五千言中大道至德修身理國の要數十章をあげて後に論兵に及んでゐる。杜光庭によると王眞は漢州の刺史といふのみであるが、阮元の四庫未收書目には其卷首に元和中之を進獻して憲宗の褒美を賜はつた事をのせてゐることを指摘し、王眞は朝議郎で出で、漢州の軍事を領し久しく戎行に列してゐた人だとある。

一〇三、符少明道譜策第二卷

佚

此れ杜光庭列する所六十餘家の一、宋志の扶少明道德經譜二卷は即此書であらう。文獻通考二一一卷に崇文總目を引いて道德經譜二卷道士扶少明撰、扶少明は何代の人か詳かでなく、道德經章句を以て略して義訓をなすとある、其大體をしのぶことが出来る。

一〇四、樹鍾山老子注二卷

佚

一〇五、李允愿老子注二卷

佚

一〇六、戴詵老子義疏六卷

佚

一〇七、憑廓老子指歸十三卷

佚

右四種唐志所載、その作者の事迹を詳かにせぬ。

一〇八、臂閻仁諱注老子二卷 佚

臂閻仁諱武后時の人で聖曆中司禮博士となつた人（新唐志及唐書一九九尹知章傳）

一〇九、廬藏用老子注二卷 佚

廬藏用字は子潛幽州范陽の人、陳子昂、趙貞固、宋之間、司馬承禎等と方外の十友と稱せられた人、艸隸に巧で當時の碑碣に其筆蹟をのこしてゐる。其傳記は唐書一二三に出てる。

一一〇、邢南和老子注 佚

開元二十年上

一一一、憑朝隱注老子 佚

憑朝隱は長樂の人開元初詔易老莊の學者を擧げしめたとき、平陽の敬會眞、會稽の康子元とともに天子に進講した人でよく老莊の祕義を推索したといふ（新唐書二百康子元傳）

一二二、白履忠注老子 佚

白履忠は汴州浚儀の人開元十年に王志愔の薦によつて侍讀と成つたが久しからずして辭しかへつた、（新唐書九十六）

一二三、尹知章老子注 佚

尹知章は絳州翼城の人、中宗の朝に一度擧用されたが後田里に歸り學問を修め睿宗のとき再び擧げられて開元六年年五十餘で死んだ。尤も易老莊に明かで著書に孝經、老子、莊子、韓子、管子、鬼谷子の注があつた。（舊唐書一八九下、新唐書一九九）

一一四、陳庭玉老子疏 佚

開元二十年上、校書郎を授けられた。

一一五、孫思邈注老子 佚

孫思邈は京兆華原の人、百家の學に通じて居たが殊に老莊に長じ、著述に老子注と莊子注とがあつたが今は傳らぬ。傳記は新唐書一九六にある。

一一六、師夜光三玄異義三十卷 佚

師夜光は幽州の人、開元二十年此書を奉つて校書郎直國士監となつた。其事跡は新唐書二百四張果傳に見えてゐる。

一一七、李含光老子莊子周易學記三卷義略三卷 佚

李會光は揚州江都の人で、本姓弘といつたが孝敬皇帝の諱をさけて李と改めた、天寶間の人である（新唐志）

一一八、吳善經注道德經二卷 佚

吳善經は貞元中の人だといふが詳しいことは判らぬ。

一一九、陸希聲道德經傳四卷 存

陸希聲は蘇州吳郡の生れで唐末昭宗に擧用された人、博學能文殊に易春秋老子が得意であつたといふ（新唐志一一六）其老子傳四卷は今も猶道藏必字號中に存する。

以上は漢志隋志、兩唐志を主として他の書物にあつて、私の知り得た老子の注釋書を列擧して見たが、宋以後の注解を此例に效つて羅列するのは煩に堪へないから、私が目睹し得たものだけに止める。

一二〇、道德眞經玄德纂疏二十卷

此本は道藏の使字號可字號覆字號に收められてゐる。卷端に唐玄宗御注并疏、嚴君平李榮注、成玄英字、強思齊纂と署して、卷首に杜光庭の乾德二年の序がある。序によると強思齊は字を默越といひ濛陽の人である。此書について特に注意すべき點は成玄英の疏を全部引いてゐて、これから成疏を完全に還現せしめ得ることである。それから又李榮の注も今道藏にあるものは殘本であるが、この書によつて補ひ得るものがある。

一二二、喬諷老子疏節解二卷

此書は宋志に著録されてゐて、文獻通考の二二二卷に崇文總目を引いて、喬諷は僞蜀に仕へて諫議大夫知制誥となつた人で、此書は敕命を奉じ唐明皇注疏及杜光庭の廣聖義から其肝要な部分を摘出して己が意見を附したのだといつてゐるが、外の著録には餘り見えてゐない。今道藏才字號に唐明皇疏外傳十卷をのせてゐる、稱して明皇疏といふけれども、其卷首に杜光庭廣聖義の總論の部分を引き、本文に入つてからも注云疏云として明皇注疏を摘出してゐるが、更に義云として杜光庭を引き、間々摘録者の意見もあつて、崇文總目に紹介された喬諷疏義節解と似てゐる。但喬諷疏義節解は二卷と記されて、此本が十卷である點は一致しないから別本であるかも知れぬが、又宋志の記載の卷數が道藏と符合せないのはありがちの事であるから多分間違なからう。

一二二、陳景元注老子二卷

碧雲子老子道德經藏室纂微二卷

宋志には陳景元の道德經注二卷を出し、別に碧雲子の纂微二卷をあげて「名を知らず」と注してゐるが、通志藝文略には纂微二卷を陳景元に歸し、宋の彭耜の集注の首にあげた解經姓氏の中に「陳景元字は太初、建昌の人、家を出て道士となり天臺山に入り張無夢に師事し、妙に老莊の旨を得たり、博學多聞にして藏書數千卷、當世名公多く之に従つて遊ぶ、自ら碧虛子と

號す、熙寧中屢召見に膺り、著すところ道德經藏室纂微篇を進め、號を眞靖大師と賜ふ」といつて居るから、宋志の碧雲子は碧虚子の誤りで、纂微と陳景元注二卷とは同じものであらう。現在道藏の欲字號から難字號の初にあつて陳景元の纂微篇十卷があるのは恐らく此書であらう。尤も宋志と通志とは二卷と記して藏本には十卷とあるのは卷數が合はないが、これは道藏纂集者の分析したのであらう。

一一三、薛致玄道德眞經藏室纂微開題科文疏五卷

同 藏室纂微手鈔下卷（上卷闕）

右二書道藏難字號に收む。初に藏室纂微疏鈔の序がある。太霞眞人薛致玄が陳景元の疏を講じて科文義注七卷と纂微開題及總章夾頌を著したとあるのは、想ふに右の二書は科文義疏七卷の殘闕で、此外に纂微の開題と總章だけ別行のものがあつたのであらう。纂微手鈔は陳景元の注を摘出して其注の本づくところを考證したもので、講義の草稿であるらしい。

一一四、呂惠卿注老子二卷

呂惠卿字は吉甫は此注二卷の外に莊子注十卷があつたと文獻通考に見えてゐる。丁氏八千卷樓には鈔本を藏した様だが、私の見たのは道藏必字號にある本だけである。其初に元豐元年正月の上表がある。

一一五、宋徽宗御解道德經四卷

右道藏才字號に收む。

一一六、宋徽宗道德眞經解義十卷

卷首序あり、卷端登仕郎臣章安撰義と署す。

一一七、道德眞經疏義十四卷

之も亦徽宗注の疏で、卷端に太學生江徵疏と題し「序に杜光庭の廣聖義に模して徽宗注を敷衍した旨を記してゐる、今道藏莫字號忘字號にある。

一一八、陳象古道德眞經解二卷

此本道藏知字號に收められて初に建中靖國元年の自序がある。建中靖國は宋の徽宗の年號。

一一九、道德眞經集註十卷

右道藏摩字號と恃字號とに渉る。凡て十卷で卷首に葛玄撰と題する長い序がある。此序は即葛仙公の老子序訣の序の部分で、之に口訣がついてゐたのが即序訣の全文である。（拙著老子原始参照）此序の次には唐玄宗の序と宋王雱の序があつて、本欄は河上公、王弼、玄宗、王雱の四家の注をあつめたものである。卷尾には元符元年西曆（一〇九八）前權英州軍事判官廻の跋があつて、跋によると昔から老子を注したものは河上公、王弼、明皇三家の注があつて、見ると

ころ同じでないが要するに大道の本を究めたもので、近世王雱は道德性命の學に精しく、その老子注も自ら一家をしてゐる。乃で太守張公が贗舎の學者に命じて四注を匯纂して刊印せしめたものが即此書で、其注文は一字も損益を加へて居ないといつてゐる。

此集注について特に注意を要することは、數ある老子注の中から河上公、王弼、玄宗、王雱の四家を選択したことが第一編纂者の卓見である。次に此書によつて老子序訣の大部分が保存されて之によつて河上公本の性質を究明し得る資料をのこしたことが第二の功績である。次に後世の集注本は徒らに採集の範圍を廣くし編纂者の主觀に本づいて損益されてゐるのに反して、代表的四家の全部を存したことが第三の悦ばしい點である。吾々は現今王弼注本の精善なテキストを持たぬが、此本によりて今本王注の誤りを正し得る點の少なくないことは未だ學界に注意されて居ない様だが、特筆大書すべき價值がある。現在刪られてゐる王弼の注本は此本によつて補ふことが出来る。私は後日機會を得て王弼本の校定を試みたいと願つてゐるが、此本も又其校定の有力な資料の一つである。王雱は有名な王安石の弟で、その老子注は王安石、陸佃、劉槩、劉涇とともに崇寧の五注と稱せられた注で、宋代儒學者の老子注中特に著名な物であるが、此れ亦此本から復元することが出来る。

一三〇、司馬光老子道德經注二卷

右宋志に著録されて居て、道藏得字號にも收められてゐるが、道藏では道論眞經論四卷と成つてゐる。然し其内容は論でなくて注である。

一三一、蘇轍老子道德經義二卷

これも亦宋志にのつてゐて道藏得字號中にあるが、道藏本は道德眞經注四卷と成つてゐる。卷尾に大觀十二年蘇子由（即轍の字）題言があつて、これによると此注は蘇子由が筠州に謫せられ僧侶と交際した結果佛教を信する様になり、其後に之を注したもので、書中屢佛教で老子を解釋してゐる。朱子の雜學辨に「蘇侍郎晩に此書を著し、吾儒を老子に合せて猶未だ足らずとなし、又釋氏を并せて之を彌縫す舛と謂ふべし」といふのは即此書である。

一三二、王守正道徳眞經行義手鈔二十卷

此本道藏量字號と墨字號とに涉つてゐるが、最初の二卷を失つて序跋もない、此中に引かれた注は主として杜光庭、陳碧虛、蘇子由で、其以後の説をのせてゐないから恐らく宋時のものであらう。

一三三、葉夢得老子解二卷

葉夢得字は少蘊、姑蘇人、自ら石林翁と號す、彭耜道德經集注雜說下に其説を引いて「論語竊かに我を老彭に比すと記す、孔子に後るゝものは孟子にして孟子の儒に於ける、蓋秋毫も少亂

せざるなり、其楊墨を拒ぎ儀秦を排するは桀紂に過ぎて終に老子に及ばず、乃其盡心知性以て命に至るをいふは則老氏の深く致意する所なり、然して後老氏の書孔孟も未嘗て廢せざるを知るといつてゐるがこれによつて大體の考は知られる、此書宣統辛亥年葉德輝の刻本がある。

一三四、邵若愚老子注四卷

此本道藏改字號中に收められて居る。其末に紹興庚辰陳某の跋があつて紹興二十九年に出來た本であることが判る。宋志に李若愚注一卷があるが或は此書であるまいか。

一三五、彭紹道德真經集注十二卷

同 集注釋文一卷

同 集注雜說二卷

右三種は道藏特己長の三字號に涉つて收められてゐる。集注卷首に紹定己丑著者の自序があつて、次に、說序と宋解經姓氏をのせてゐる。試に解經姓氏を引かう。

政和御注

碧虛子陳景元、字太初、建昌人、出家爲道士、入天臺山、師事張無得、妙得老莊之旨、博學多聞、藏書數千卷、當世名公多從之游、自號碧虛子、熙寧中屢膺召見、進所著道德經藏室纂微篇、賜號真靖太師、

涑水司馬光 字君實、陝州夏縣人、溫國文正公

穎濱蘇轍 字子由、眉山人、自號穎濱遺老、諡文定公、

臨川王安石 字介甫、臨川人、荆國文公、

王粲 字元澤、荆公之子、

陸佃 字農師、山陰人、門人號曰陶山先生、

劉槩 字仲平、開封人、

劉涇 字巨濟、簡州陽安人、自號前溪、

自荆公下至此、總名崇熙五注、

道真仁靜先生曹道冲 字希蘊、女道士、世號曹仙姑、賜號清虛文逸大師、道真仁靜先生、

真真子 馬蹄山人、不著姓氏、

三峨了 一子李文和 蜀人、

陳象古 名在黨籍中、

葉夢得 字少蘊、姑蘇人、自號石林翁、

清源子劉曠 字德稱、泉州人、

晦菴朱熹 字元晦、建安人、自號晦菴、一號紫陽子、文公、

黃茂材 字少譽、福州連江人、自號海濱居士、

程大昌 字泰之新安人、文簡公、

林東 字子晦、福州閩縣人、自號三山樵子、

本來子邵若愚 錢塘人、

以上十九家が此書の中に引據されてゐるが然し全部を引いてゐるのでなく取捨が加つて居る。釋文一卷は政和御注本によつて李林二家の音釋をあげて、陸德明釋文の足らぬ所を補ふといつてゐる。李林とは即李文和と林東とであらう。老子の注釋は無數にあるが、其異同を校合して音釋したものは極めて少ない。陸氏釋文の後には唐の傅奕の音があつたらしいが、今は傳はらぬ。此本實にその缺を補ふものといふべきである。又此書の中屢陸氏釋文を引いてゐるが、間々今本釋文の誤を正すに足るものがある、此點特に價値がある。

集注雜説は上下二卷に分れ、古から老子に關する佚聞、論説をあつめたもので考證の資料になるものが多い。明の焦弱侯老子翼の附録は此書に材を取るものが多い。

一三六、董思靖道德眞經集解四卷

右道藏短字號本、前に淳祐丙午序説があつて、序説の中に老子の注釋は澤山あるが折衷するところがなから諸説の中よいものをおつめ、間々己れの見を附し又音釋をつけて異同を訂した

といひ、又白樂天の語を引いて、老子五千言は藥をいはず白日昇天をいはずといつて、道家の迷信的方面を排斥してゐる。而して其本注に引かれた諸家も司馬光、蘇轍、朱子、伊川、文定等の儒家の説が多い點を見ても此集注の性質が知られる、毎節の下に先づ己れの注を加へ、その後圈を附して先人の説を引き、最後に右幾章と題してその下に河上公本の章名を出して諸家の意見を引き、全章の大意を明にしてゐる。其第三十一章と七十五章の下に「王弼曰疑此非老子作」とあるは、今の王本にない文句で特に注意すべきである。此王弼注は宋以前の王本には存在したもので、四家集注本にも引かれ、王應麟晁景迂も之を見てゐる。而して敦煌本玄言新記にも引かれてゐる。

一三七、范應元老子道德經古本集注二卷

此本宋志にもせず、道藏にも入つて居らぬが、近年上海商務印書館から出た續古逸叢書の中に宋本の影印がある。此書、前玉隆萬壽宮掌教南岳壽寧觀長講果山范應元集注直解と題し、後序一則あり、湛然堂無隱谷神子范應元薰香謹序と題し、劉惟永の道德眞經集義引用書目にも此書をのせてゐる。褚伯秀の南華眞經義海纂微は范無隱の説を引きその跋に伯秀が淳祐丙午の歳京に於て范應元の講席に侍したことをいひ、其師の事を記して范應元字は善甫、無隱と號す、蜀の順慶の人、學内外に通じ識天人を究む、靜重端方、動心不禮に中る、經に所謂言はずして

人に飲ましむるに和を以てし、人と並び立ちて人をして化せしむるもの是也と賞讃して居る。今其内容を檢するに前人の説を引くもの三十餘家に及んでゐるが、必ずしも老子の注のみをあつめたのでなく、韓康伯、郭璞の説などは易注爾雅注によつた事疑ひない。褚伯秀が學内外を兼るといつたのも故あることである。而して此内に特に悦しく思ふのは、既に亡びた傳奕の音義を引いたことと彼が見た王弼本が今本と異つてゐることである。私は此書によつて今本王弼本の誤りを正し得る材料を得たこと、及傳奕本の考證に便なることを悦ぶ。其本文は古本といつてゐて、傳奕本に近いが亦異同も少なくない。馬夷初教授は此古本は王弼本だらうといつて居られるが、書中屢「王弼同古本」といふ語があつて王本と全同はしない様に思はれる。想ふに茫應元當時此種のテキストが別に存在したのであらう。

宋史藝文志に「谷神子注經諸家道德經疏二卷」をあげて其下に「河上公、葛籟公、鄭思遠、睿宗、玄宗疏」と注し、文獻通考に崇文書目を引いて「此書撰人の名氏を著さず、河上公葛籟公鄭思遠唐睿宗明皇諸家注を集め其自疏を序す」といつてゐる。其谷神子注經とあるは此書の著者と關係があるまいか。

一三八、林希逸道德真經口義四卷

右道藏彼字號本、景定辛酉に成る。初に發題があつて、次に解を施す、往々佛教にわたる此書

は流傳甚だ廣し、我國にも屢翻刻されてゐる。

一三九、李息齋道德真經解義四卷

右道藏絲字號にある、焦弱侯の老子翼に息齋注を引くもの多く、その采摭書目にも息齋注を出して「嘉謨著道德經先天道德經二解」と注し、丁氏八千卷樓書目宋李嘉謨の道德真經義解四卷と、元始說先天道德經注解五卷とをあげてゐる。道藏本には序跋なく唯息齋道人解と題して居るだけであるが、本名は李嘉謨で息齋はその號であらう。道藏目錄詳注には、同じく絲字號中にある李榮注を息齋としてゐるが、これは全く別人で混同してはならぬ。

一四〇、趙志堅道德經疏義六卷

これ亦道藏悲字號に收められてゐるが、前三卷を闕いて今たゞ德經疏義だけがある。每章目の下に科段を分けてゐてその序跋の考ふべきものがない。宋志に趙志堅道德經疏三卷をあげてゐるのは恐らく此書の事であらう。

一四一、趙學士道德真經集解四卷

右道藏罔字號收録、前後に序跋もなく、古注をも引いてゐないから、其製作年代も作者の書跡も明瞭でない。焦弱侯の老子翼采摭書目に趙秉文集解を出して「宋學士」と注してゐる點から想像すると、趙學士は趙秉文であらう。趙秉文の集解四卷は小萬卷樓に藏すと四庫簡明目録標

注に見えてゐるが、外に傳本あるを知らぬから兩本を比較するにたよりが無い。

一四二、杜時雍道德真經全解二卷

右道藏罔字號にある。初に正隆四年（正隆は金の海陵王の年號で宋の紹興二十九年に當る）の序があつて、序によると眞定（即今直隸の正定府）から毫にかへつた人がもちかへつた本を、時雍が刻したものだといふ。

一四三、李霖道德真經取善集十二卷

右道藏墨字悲字兩號に涉る。卷首に大定壬辰河内劉元升の序がある。大定は金の世宗の年號で其四年は宋の乾道八年に當る。序に「饒陽の李霖字は宗傳、性喜く恬恬幼より老に至るまで終身確然として五千の文を精研し、諸家の長を會聚し己れの見を并叙して取善集六卷を成す、其舊友其勤を賞して其志を成し工に命じ鏤版せしむ」とある。其作者と其成書とを説明し得たものである。序には六卷というて、十二卷に成つて居るのは道藏編纂者の分析した結果であらう。書中唐以前の説は大抵張君相の三十家集注に本づいてゐるらしく、宋人の注では徽宗御注及び呂吉甫、陳景元、王元澤、司馬溫公、蘇子由、劉仲平、馬巨濟（劉巨濟カ）曹道仲の説を取つて居る。

一四四、道德真經四子道古集解十卷

右道藏通字號に收む。初に古襄寇才質集と題し、前に金大定十九年（即宋の淳熙六年）の自序がある。序によると編者は草澤無名の野人で、老子舊注の眞を失するをなげき、莊列文庚の四子によつて解釋したもので、もとは四子古道義と名づけたものらしい。舊注から離れて莊列によつて解を求めたのは確かに一見識といへる。序によると寇才質には別に道德經經史疏十卷があつて、此注と表裏をなしたといふが今は傳はらぬ。

一四五、道德真經次解二卷

右道藏罔字號に收められて居る。卷端に無名氏著と題し「此本舊本と同じからすといへども自ら義理あり、細かに議論すれば別に旨趣あり將來君子妄に修改商較する勿れ」と注し、上下卷末に通行本との異同を條擧してゐる。序によると此注本の經文は遂州龍興觀の碑上に刻せられた老子に本づいたものだといつてゐる。遂州は四川省にある地名で此地に龍興觀が立てられたことは唐會要に出てゐるから、此碑の經文も唐代のものとして推測せられる。さうして輓近敦煌から出た寫本の斷片にこれと全く同じものがある。彼此對照すると唐初に流行した老子の一テキストを復元することが出来る。此意味に於て次解本は老子研究の重要な資料といはねばならぬ。

一四六、吳澄道德真經注四卷

右道藏短字號本百子全書本等があつて四庫全書にも著録されてゐる。提要によるとこの書は元

の大徳十一年に吳澄が病により京を辭して南に下り清都觀に留まつた際に著した書、吳澄は陸象山學をついだ人で、此注も儒學で老子を解したものであるが精邃なところが多いといふ。其尾に「老氏之書字多誤、合數十家校其同異、攷正如右、莊君平所傳章七十二、諸家所傳章八十一、然有不當分而分者、定爲六十八章云、上篇三十二章二千三百六十六字、下篇三十六章二千九百二十六字、總之五千二百九十二字云」とある、その分章は魏源の老子本義に襲はれてゐる。

一四七、李道純道德經會元二卷

道藏淡字號中にある。首に至元庚寅の序、次に序例、序例中又正辭究理の二項を分つ、正辭は經文の異同を論じたもので、道純は河上公本を尤もよいと信じた人で、彼によると河上本に河上公解注本と、二家全解本と章句白本との三種があつて最後の本が尤もよいといひ、其同異廿一條をあげてゐる。而して究理は諸家解注の理に合はない點を指摘したものである。其注例、初に經文に従つて頤神養氣の要を説き、次に全章の理を説き最後に頌を作つて明心見性の機を示す、序によると道純は紫清道人の道德寶章を好むといふ。紫清道人は本名を葛長庚といひ宋の頃武夷山に居た道士で白玉蟾とも號した人、その寶章一卷は文字の意義を注せず、たゞ其自得をのべたもので禪理に近いものだといはれてゐるが、道藏目錄詳注には道純の注も禪宗に類

すと評してゐる。

一四八、林志堅道德眞經注二卷

右道藏絲字號中に收められてゐる。卷首に至正歲次甲午著者の自序があつて、序後に老子の經文を綴り合はせて兩經の序としてゐる、卷端には玄門開眞弘教大眞人廣陵仁齋林志堅注と署名し毎章名は河上公本を襲うて、其注皆經中他の章の文句を以て解を施してゐる。是れ老子を以て老子を解すとも評すべきもので他の注解と趣を異にしてゐる點である。

一四九、鄧錡道德眞經三解四卷

右道藏改字號本、初に大徳二年の自序がある。書中三種解を施す、第一は解經といつて老子經文に虚字を増益して讀みやすくし、第二は解道といつて理によつて天地の大道をのべ、第三は解德といつて天地間の總ての事象が理に合することをのべ、此三種の解を合せて一としたから三解といつたのである。

一五〇、劉惟永、道德眞經集義三十一卷大旨三卷

右道藏染字詩字讚字の三號に涉る、卷端には劉惟永集、丁易東校正と題して居るが、その跋文によると劉丁兩家の所藏本を合纂したもので、もとは三十一卷であつたといふが今は十七卷と大旨三卷だけ残つて居る。大旨中に集められた諸家の姓氏は左の通りである。

河上公 漢人作注

王輔嗣 魏人諱弼作注

唐明皇 玄宗大聖大明孝皇帝、開元癸亥御注並疏、

杜光庭 後蜀廣德先生、天復辛酉作廣聖義

宋道君 徽宗皇帝御注

王介甫 宋太傅荆國文公諱安石字介甫作注

蘇穎濱 宋太中大夫門下侍郎、諱轍、字子由、元符庚辰作注

呂吉甫 宋觀文殿學士醴泉觀使諱惠卿作解

陸農師 宋中大夫知亳州諱佃作解

王元澤 宋龍圖直學士左諫議大夫臨川伯諱粲作解

劉仲平 宋臣作解

劉巨濟 宋職方郎中諱涇、作解

丞相新說 見八注中不載其名

劉驥 號清源子、紹興丙寅作解

趙實庵 沖真寶元大師浮山玉虛觀住持賜紫、字明舉、諱道昇、紹興壬申作解

邵有愚 號本來子、紹興己卯作解

王志然 號見獨大師、乾道己丑作解

程泰之 宋吏部尚書龍圖閣學士文簡公諱大昌乾道己丑作易通言

黃茂材 宋知荆門軍事、淳熙甲午作解、

朱紫陽 宋太師徽國文公諱熹字元晦、慶元乙卯有楚辭辨證及語錄

詹秋圃 宋儒林諱節、號漫叟、作解、

白玉蟾 號紫清老人、作解、

廖粹然 號希夷大師、作解、

陳碧虛 諱景元、號碧虛子、乙未造解、

謝圖南 宋朝散大夫、號蓮山天飴子、淳祐丙午作註、

林虜齋 宋翰林學士號竹溪、諱希逸、景定辛酉作口義、

范應元 南嶽壽寧觀主號果山無隱齋谷神子、作解、

徐君約 宋鄂州諸軍料院諱權、景定壬戌解序一章

薛庸齋 諱玄、大元河南路提學、作解、

休休庵 號蒙山絕牧叟、名德異、至元戊寅作解、

牛妙傳 通真大師前成都府萬壽宮知宮提舉、號澄明子、至元庚辰作或問、
褚伯秀 古抗道士、作解、

喻清中 寶慶府教授、至元乙酉作解、

楊智仁 號無物子、至元丁亥作解、

胥六虛 諱元一號六虛散人、至元辛卯作解、

李是從 特賜純粹先生、號谷神子、造解、元貞乙未刻本、

已上三十六家係全解削煩編次

張仲應 玉清上相諱明道、寶祐癸丑造解、

張靈應 諱亞、宋封神文聖武孝德忠仁王、造或問、

以上二家係鸞筆、

蘇敬靜 前文林郎潭州糧料院、宋開慶進士敬靜蘇起翁、本一庵居士、

紫元臯

吳環中

以上四家係續補

以上は劉惟永が引いた前代の注釋で廣く宋元人の注を存してゐる點に於て尊重すべきであるが

惜しいことには完全に残つてゐないことである。序によると此本が出来上つたのは元の大徳三年にあたる。

一五一、杜道堅道德真經原旨四卷、原旨發揮二卷

右道藏彼字號本、杜道堅字は南谷、當塗の人、武康計壽山昇元觀の道士、此注大徳年間に成る。發揮二卷は十二章から出來てゐて、初六章は周以前老子が屢生れ代つて皇王の治を教へたこと、後六章は周の世に降生して西遊した事を記してゐるが、要するに化胡經等の傳説をあつめたものにすぎない。

一五二、張嗣成道德真經章句訓頌二卷

右道藏淡字號本初に至治壬戌の自序をのせてゐる。

一五三、道德真經解三卷

右道藏淡字號にあつて、無名氏内解と題してゐるが何人何時の解か明でない。

一五四、明太祖御注道德經二卷

右は明志にあげてゐるが道藏男字號に收められた本は四卷に分たれてゐる。

一五五、危大有道德真經十卷

右道藏覆字號に收む。卷首に洪武丁卯肝江危大有の序があつて、序中に「諸家注釋或は異或は

同、得あり、失あり、是に於て河上公何心山等十餘家注解を以て其訓釋詳明にして理長し牽強せざるものを取り集めて一部上下二卷となし、名けて道德經集成といふ」とあるからもとは一巻で道藏本は編纂者が巻を分けたものであらう。此中に引かれた前人の注は次の通りである。

河上公

呂知常 (呂知常は宋の孝宗の時の人、其道德經講義十二卷明刊本あり)

何心山 字處尹

李道純 號清菴

劉師立 號眞靜子

倪思 號齊齋

林希逸 號虜齋

蘇轍 字子由

黃思靖

晁

柴元阜 號知白

吳澄 號草廬

一五六、焦竑老子翼二卷考異一卷

此書は明の焦竑字は弱侯の著で卷首に萬曆十五年の序がある。序によると、著者は二十三歳の時から老子を読みはじめて二十年間もかゝつて此本が出来たといふ。其初に採摭書目があつて前人の注六十四家をあげて居るが、その大部分は道藏中のもので古い注解は大抵孫引にすぎない。その道藏にも前に列擧した集注本にも引かれてゐないものは薛君采の集解、王純甫の老子億、李宏甫の解老くらゐである。薛君采名は蕙明の亳州の人、其老子集解二卷考異一卷は惜陰軒叢書中に收められて居り、其序は老子翼の附録にも引かれてゐる。序によると薛蕙の集解は嘉靖九年に出来上つて刊行されたが、後再治して嘉靖十六年完成したものである。附録考異一卷は焦竑の考異の基礎と成つた本である。王純甫名は道、順渠と號す、山東武城の人、その老子億四卷は流傳甚だ少なかつたが、幸に前田侯爵家尊經閣に一本を存し、昭和七年その文集とともに影印せられた。李容甫名は載質、溫陵の人、著すところ老子解二卷、李氏春秋、莊子内篇解、心經解がある。老子解の序は翼の附録に引かれて居るが原本は見ない。然しその序で想像すると薛王李三人は儒佛と老子とを融合する考へ方で、焦弱侯と似た思想の人であるらしく、恐らくこれがこの時代一般の學風であらう。

宋から明に至る間の老子の註釋書を通覽すると大略二つの傾向が看取される。第一は新しい著

作といふよりは寧ろ先人の説を集成した書物の多いこと、第二は儒佛を合糅して新義を立てたものはあるが、老子本来の古義を闡明したものの少ないことである。清朝になつて考證學が一世を風靡するに及んで此傾向は一變し、先づ異本を校勘して正しいテキストを作り、古書に參考して古義を明にすることを主眼とする様に成つた。此の時代の代表的著作は畢沅の老子攷異、馬叙倫の老子覈詁、王念孫の讀書雜誌之餘、俞樾の諸子平議等であらう。

二 清 以 後

- 王夫之、老子衍二卷 船山遺書本
- 清世祖御註、道德經二卷 四庫全書本
- 張爾岐、老子說略二卷 四庫全書本
- 汪縉、讀道德經私記二卷 存目
- 黃元御、道德經懸解二卷 存目
- 唐瑄、老子注二卷 雍正五年
- 胡與高、道德經編註二卷 乾隆戊辰
- 徐大椿、道德經註二卷 四庫本

- 金道果、道德經寶章翼 抄本
- 未齋老子新解 錢大昕序
- 牟庭、釋老、道德經釋文 未刊
- 花尙、道德經眼二卷
- 王定柱、道德經臆註二卷
- 黃文運、道德經訂註 序見湖海文傳
- 吳鼎、老子解二卷 昭代叢書
- 嚴可均、老子唐本考異 續語堂碑錄
- 畢沅、老子道德經考異二卷 經訓堂本、日本官版
- 姚鼐、老子章義二卷 指抱軒全集本
- 紀大奎、老子約說四編 紹慎齋本
- 朱敦毅、老子道德經參互二卷
- 倪元坦、道德經參注二卷
- 魏源、老子本義二卷
- 潘靜觀、道德經妙門約

俞樾、老子平議一卷 春在堂本

高延第、老子證義二卷 光緒十二年

陸心源、道德經指歸校補三卷 群書校補

易順鼎、讀老札記二卷補遺一卷 光緒甲申

王闓運、老子注二卷

陳澧、老子注

易佩紳、老子解二卷 光緒壬辰

楊文會、道德經發隱一卷

嚴復、老子道德經評點二卷

劉師培、老子斟補二卷 國學叢刊

又、老子韻表一卷

馬其昶、老子故二卷

李蠡、讀老淺疏二卷 春風叢書本

楊樹達、老子古義二卷

羅振玉、老子考異二卷 永豐鄉人雜著本

羅運賢、老子集解 華國月刊

顧實、道德經解詁 國學叢刊

馬叙論、老子覈詰四卷 佚文一卷

私が「老子の研究」に道德經の注釋書の解題をかいた後間もなく、民國十六年七月に王重民君の「老子考」二冊が中華圖書館叢書の第一種として發刊された。その中に著録された書物の數は私の解題よりは遙かに多く、私が全く手をつけなかつた清朝以後の著作にも及んでゐる。そこで王重民君の書から清人の注釋書の名を拾つて見ると以上の二十二種を得た。猶この外にも遺漏を拾つて見ると

盧文昭、老子音義考證一卷 抱經齋叢書本

張煦、老子考異錄一卷

洪頤煊、老子叢錄一卷

徐鼎、老子雜誌一卷

王念孫、老子雜誌一卷

孫詒讓、老子札迓一卷

李慈銘、訂老子一卷 鷗窠日記

陶方琦、校老子一卷

譚獻、讀老子一卷

黃裳、道德經講義三卷

徐紹楨、道德經述義一卷

陶鴻慶、讀老札記一卷

丁福保、老子道德經箋注一卷

北平研究院、古本道德經校刊

などがある。更に搜索すれば猶遺漏があらう。これらの書中特に注意を要する點は、(一)此時代に入ると文字の同異を校定した本の多いこと、(二)訓詁學的に解釋しようとしてゐるものが多いこと、(三)分章についても獨自の見解を持してゐるもの、存することなどを數へることができ、第一校勘學方面に於てすぐれたものは畢沅、嚴可均、馬叙倫、及び北平研究院等で、特に馬氏の著が最も博覽を極めて居るが、北平研究院の校刊の首には、唐、景龍碑、易州開元幢、邢臺龍興觀經幢、焦山廣明幢、易州景福碑、慶陽道德經、蓋屋古文老子碑、寶鷄碯官幢等の寫眞が掲げられてゐるのはうれしい。第三の訓詁學方面に於ては矢張り王念孫、俞樾、孫詒讓が尤も力があるやうに思ふ。さうして第三の分章については魏源の老子本義は大體に於いて元の吳澄の分

章を襲つてゐるが、姚姬傳の老子章義は桐城派一流の文章觀に本づくもので特色もあり參考にもなる。

三 日 本

日本の老子注は徂徠學派のものと折衷學派のものが多い、先づ徂徠學派のものをあげると

太宰 春臺 老子特解

渡邊 蒙庵 老子愚讀

片山 兼山 老子類說

萩原 大麓 老子考

萩原 嵩岳 老子攷

久保 筑水 老子考注

松下 葵岡 諸子考注

重野 櫟軒 老子解

太田 子龍 老子國字解

龜井 昭陽 老子考

廣瀬 淡窗 老子摘解、折玄

宇佐美瀧水 校刻王注老子

海保 青陵 老子國字解

戸崎 談園 讀老子正訓

市川 鶴鳴 老子考文

伊藤 兩村 老莊考

岳 鸞 老子古解

冢田 大峰 家注老子

次に折衷學派のものをあげると左の如くである。

龜田 鵬齋 老莊措解

仁科 白谷 老子解

東條 一堂 老子標注

大田 錦城 老子妙微

大田 晴軒 老子全解

中江 乾齋 老子注解

この外の邦人の老子注釋には

新井 祐登 老子形氣、及隨筆

豊浦 懷 老子妄言

三野 元密 老子經古義

近藤 舜政 老子本義

伊藤蘭岨序 老子是正

金 蘭 齋 老子國字解

葛西 因是 老子輻注

佐藤 楚材 老子講義

根本 通明 老子講義

三島 毅 老子講義

久保 天隨 老子新釋

などがある。これらの内特に價値あるものは太田晴軒の老子全解、海保青陵の老子國字解、東條一堂の老子標注である。

老子の研究(上) 終り

7313

改造選書



昭和二十二年九月一日 印刷
昭和二十二年九月五日 發行

老子の研究(上)

定價 六十五圓

著者 武内義雄

裝幀者 恩地孝四郎

發行者 山本俊太

東京都中央区京橋一ノ三

印刷者 大野治輔

東京都北区稻付町一ノ二〇八

發兌 改造社

東京都中央区京橋一ノ三
振替東京八四〇二
電話京橋(56) 六一六六
九〇二

配給元 東京都千代田區神田淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社
印刷所 東京都北区稻付町一ノ二〇八 二葉印刷株式會社

改造選書

ロシア文學の理想と現實 (上・下)	朝永三十郎著	(定價各二〇・〇〇切)
カントの平和論	朝永三十郎著	(定價 一七・〇〇切)
エミール (上・下)	ル山賢次オ譯著	(定價上五〇・〇〇 下八〇・〇〇切)
ダーウイン傳	駒井卓著	(定價 四〇・〇〇切)
ジンメルの經濟哲學	恒藤恭著	(定價 五〇・〇〇切)
日本社會史	本庄榮治郎著	(定價 四〇・〇〇切)
國富論 第一卷	アダム・スミス著	(定價 五〇・〇〇切)
若きヴェルテルの悩み	竹内謙二譯	(定價 五〇・〇〇切)
老子の研究 (下)	阿部六部譯作	(定價 五五・〇〇切)
近世日本農村經濟史論 (徳川時代)	武内義雄著	(近刊)
	土屋喬雄著	(近刊)

(送料各冊 一一・〇〇)

終

21